

傍廂

二



105
674
2





傍 廂 卷 之 二 目 録

おもゝろ丸 初ラ

霞 時 雨 ニラ

嘉 定 税 四ウ

冬のおてし 三ウ

空籠 四ウ

聾 五ウ

坊 主 六ウ

やよ 七ウ

延齡のまき 七ウ

似 顔 繪 八ウ

箒 木 九ウ

重言の畧 十ウ

菊 十一ウ

なう 十二ウ

髪髭と墨 十三ウ

花 十四ウ

かつ 十五ウ

神の所 十五ウ

傍 廂 卷 三 目 録

たを... あり 十

墨引薪 二十

籬 十

まつらさよ... 二十

江戸人の勇氣 十八

鎗 日

庚申狂哥 十九

桶箱 二十

神位 二十

單物帷子 二十四

一筆 日

圓位上人の杖 日

碁目鐫 二十

私の官位 二十五

傍廂卷之二

藤原彦磨隨筆

かゆしうき

かゆしうき... のき... け... け...
 よろと... け... の... と... の...
 あ... け... け... け...
 皇孫建王八歳薨今城谷上起殯而收云冬十月庚戌朔甲子幸紀温湯天皇憶皇孫建王愴雨泣乃口

傍廂卷之二

耶麻古曳底干涉倭艳留騰母於母之樓枳伊麻
紀能禹知播倭須羅度麻自珥

この御歌の大和より紀伊へ山と云え海よりてゆけども

あそまふなつうくおもろくも今城山の建王と

葬る新の志まごころとまりまべておろきいふ

ふうくあめぬまが其の其うちをさぬの目赤みろが

ぬく涼くあめぬまが其の其うちをさぬの目赤みろが

石門ひらき新の衆面皆明白也とりよとおもろく

りて上天初時衆俱相見面皆明白云まのめろく

推説あり

霞時雨

妻の衣と冬の時ありに戸あていりるり山多き

よあてい衣あつて山城をむらむく緒引ちへらん

かく山のさままひ木立ると見えなごう空うあめぬが

うまみどりさちさうさる衣あつて浅縁まゝいよめる

有り軽日夕日のうらつり時ありをむきされごちていゆさう

に戸あてい衣あつても見えなごう冬のしごまも山多き

あてい山のあひより雲立ぬて俄ああり出るさちより

目新さしてさるいよそあめなり又松よりくもり来て

あめりぬるさやがて晴なり夜よりありこありむら

定められたおそれがあるからさういふやうな事になりはせぬ
に十月あても討つるあゝを織の長を日救ふ也

嘉定祝

六月嘉定の式の重き事と庖丁書録に六月十六日
定む近世に依りし傳る室町家大樹の時六月納涼の
松比のる小揚弓と射てうけおとす者嘉定錦十六文
と出して食物を買て勝る者とりておん嘉定の宋寧
宗の年号とあまこと師翁貞丈大人云く室町家年
中の事の時ともあひ見えぬといひまじり師翁の系
將軍代々の近親をまじり旧記悉くお蔵せしる嘉定の實

の傳へん元龜三年六月十六日遠江に於て
幡宮へ 沖參詣の祈社中あて表ふ嘉定通宝裏小
十六と鑄する錢と拾いせ給ひて諸軍示して嘉定の
よろこびと定むるなり十六の當日なり勝利の瑞なりと
のさすか討ふあひあひて大久保後五所六種の菓子款
上せんそと沖旅飯へ持ゆしと祈社系よりすてあめ
ふふてなりし之益所歎ありしとあり是正祝なり
足利の松貞如き後世までの重き大札とす給ふべからぬ
後五所の足小旗炮廠ありて歩ゆりかき處小所菓
子月とありて本白根所の辺小地祈給へり大坂屋城

の後嘉定の京都みて祝ひし八朔の江戸みて祝ひ
終ひし所吉例ありしと受安二年より一夜中終しるを
又あそし終へりさるを嘉定と嘉祥とて仁明天皇より
始るといひ又大宝元年六月十六日宴と終ひしよりて
天武天皇より始るなどまありしつるの皆推量の私
みてとるふとるま

冬のみでしと

上古よりあつまでしといはれふかのづらう生むてらる紅
の花咲り其の始小咲初て秋と経て冬まで由咲り萬
葉集みるでしよの花あまこあふはるはる古今集の次に

い
は
し

吳玉より種々傳へるありし由とありのそやまとみでしとこ
りり一庭みつらうさつる吳玉までしとい早くうれえて終ひ
あふ自然生れし物とありのいのち長きりの人後撰集小
十月をうり小冬友わて終りて終りまはる
冬なれと君が垣根小咲ぬまはるる友み
又定家卿由

玉のさゆりあとのさうのあぐれふひと花咲るやまと
あてしと

更科日記ふも秋の末ふありしうが京ふ大和までしとゆ
咲るさかうしづりしありまはるはるより皇朝小あり

るべしと之後小吳女より傳へし瞿麥や大蘭とも石竹
とも洛陽花とも救名あり

空籠

古今集の作者の中小女の名空籠アツまに籠チヨウ又籠チラ
とも之趣むりありて異本ありてあてあきかた死名あり
さる友小古人考へぬるもときろむあまの女の父ま
見る内務寮の頭助允まの官の附小内へまする女あり
よび名と内務とひひ一紙茶書みて因縁と去りとまひひ
あて上の二字の如くまりしうんとの女の常陸へま
る付小後系公後小とそつりる付の字小

ねむげふえへきまゝと。まのまねがあひさちぬる
まろ。まり

とある二句小公後の名ありに白小さうて新所の常陸の
國名あり結句小とらうのなと入るるべしまて女の
よび名いさぬもあまさと大うの父まの友名とよび
か多し小児もありる百人一首の中る女のよび名
○伊勢の伊勢守結佐の女のよび名○右近の右近少将季繩の女のよび名
○和泉式部のよび名和泉守道貞のよび名○大貳三位のよび名太宰大貳成章のよび名
素のよび名○赤深のよび名太事のよび名の赤深時用のよび名女のよび名○小式部のよび名内侍のよび名和泉式部のよび名
の女のよび名○伊勢大輔のよび名の伊勢系のよび名主輔親のよび名女のよび名○清少のよび名納言のよび名

清原元輔の女有り。相模のお模る公資ある有り。周防内侍
の周防守経仲の女有り。紀伊の紀伊守重経の妹なる例あり
あると云ふは内務寮の氏脚允なるの女妻のよび名有り
けんとおもつる有り

龍耳

加藤千彦の月次今日我若うり。時季彦縣令と
安田躬弦と二人あてり。何れもと相済し。中
子彦の云く近江の本辰宣長とて令龍耳なり。これと
いふまじと傍あてり。聞て躬弦が云く宣長と假名龍耳と
のこまふ。子彦先生のま名龍耳やとのひりきと。千彦

ふいづえむ人いおとまきて。ひぬ季彦縣令ふ
すえぬことと。か。又或やんととまき。若の漸生人
あて人々おごり。守の殿のこまふ。近江季
彦が相寄ふ
我耳のをく。年とて。すえぬ。をさう
むくひ

とよと。いとお。り。このまひ。れ。漸生人。ふ。若
ら。其の年。若。さ。の。若。か。の。ま。ゆ。り。ん
さ。あ。せ。若。ふ。あ。む。と。り。被。殿。さ。ゆ。め
このまふ。被。さ。り。あ。む

我舟のをくまりし年と終てきうぬらさうと
りりし報が

とりひけまわりのつとよとがめ終りてらよあり
入真し終ひるりなりし我由今の年を

坊主

坊主の寺院の任持して一坊の主とし義之其外の元
信の同宿としひて坊主としりて文治元年十一月廿
二月前伊豫守深我経吉持山の堂と凌ぎて潜ふ多
武家小判悉せし南院の内蔵室の坊主十字坊と
りし大恩傍義経と賞就しるより東艦ふあり是

や
わ

任持と坊主としりし又同二年三月六日大衆蜂起
よりて其所より山卧の姿とありて大家み入んとす
る小伴の坊主の傍義経と送りしありありあり任持
送りし元徳と送りしめさるふありて終と當世
の法師の文もゆりてを醫師茶道俳人狂人隱居み
るまを剃髪の人々悉く坊主としりしをいれは蔬を
する安宿ともを食坊主看より坊主としりし一坊の
をみて宿するの衣もせり

やよ

古今集玉生忠家の長安の中ふ云く「あきふそいまる

私の老の救さ人やよけまかまくとあるやよけいりある義と
定らるる秋のるー或のやよけ弱めて年老てかたりへるる
いひ或の俗言のよけいとりの義ありなどりまことまて
友のふやよけ弥の義ありんイヤの音かのづうオホの
かしらふかびうつてヨとありーありオのヨふよふべき
音ありねと連声ふ引されてかのづううつうとるるる
一三月の弥生あるとヤヨヒとりのと同ト格めてオのヨ
ふよけねとヤオの反ヨふればかのづううつうてさるる
しをうん

延齡のあのみしれもの

高貴の所威勢ふも万箱の金玉ふもあう及ぶ
の齡あり我独々一とりのとも高位大録の貴人も
財宝充滿の富人も親しくむるべし八十色ても程病る
とくよろるる友へ命ふまざる宝のありるる極上
の臺とむねとする仏書ふも大智度論の設満世
界寶無有直身命とも一切寶中人命第一為命求
財不為財求命とあり吉田兼好法師が人の口十小
さうで志ぬるとそめやまをさとのひー舌のあはぬ程小
命万金よりもまうとのひーとそまむれ命ふとそ
家のあごめのとそ志あいやまうるとよめれ実の長く

ゆがるとぬりぬ人のひとりゆりゆりさきば安公決定して
上泉上生の位とてゆり取らる如くあへる名僧知識も
病疾あまびりそだ醫師と振きて茶とをひ死とのか
きんととるゆあゆをやあまき情の本意あり

似顔繪

似顔繪といと古くよりあり文徳実録小百濟朝臣河
成在宮中令或人喚從者或人辞以未見容顔
河成取一紙圖其形體或人遂驗得とあり源氏
物語末栴花巻小髪あき女どかき顔ひて鼻小紅とつあて
見ゆゆ小云是の常陸姫宮の似顔とらき顔ひりあり

世小りりて菱川師宜西川祐信と名人ありそのち
勝川春章居清長まて近末哥磨豊岡なともあり
かけりあつた若き男女などの姿とわらふ肩とまらぬ
と膚小りせてきげ小あまら姿小うけりさるる衣
冠の友人も甲冑の武士も年若く容顔うたへて
さるさる小かけりきげ小あまらあがりて身を不ら
えゆりかちやりゆのあり

坂上足則の字小
そのちゆふせを小あつる箒木のありといふえて

箒木

ありぬる

は家ふよりて源氏第本をいつらいつらなり
の依濃玉あり英濃の玉界あり
さきかありといふ
玉矢矧の大橋の上より
おき本あり里人の云く彼の伊勢玉
のひ侍へといふ
景行天皇の所代小筑後の所本
景行天皇の所代小筑後の所本

朝日あり肥前の杵島とかく
かくきよし書紀小あり
大木ありて朝日あり
古事記小あり又肥前佐賀郡小
小の杵島蒲川とあり
風去紀小あり
月の淡路島とかく
小あり近江玉粟郡小
さし夕日あり
ふれ小あり我若うり

仁徳天皇の御代小
及び夕日あり
大樟樹ありて
草檜とあり
井に小
大楠ありて
大倭島根とかく
朝日あり丹波小

今昔物語あり

大榎ありて

二

まごみ 諸本竹など 叔十株生かさるより 紀の殿より 所中
届ふよりて 繪巻さへ 束さるるを 見て 今あまねく 有る所へ

重言の畧

師翁の玉勝間こころ古今集こころの一月つき秋あきより一秋あきより一人ひと不ふ若わかやら
ばとあるの月つき秋あきより一月つき秋あきより一とさねて 篠しのふべ死しと五
七言ごしちげんのあへふも人のんとて 畧りやくきてわくの篠しのひより 催馬さいば
樂らの「あづまやのまやのあまりのあそびぎさ」もあづまやのあづ
まやのとうさねて 篠しのあへきと 是こゝも五七ごしちふとの入いてう 畧りやくさ
るるより 和名抄わななせうの四阿しやあと 兩下りやうげとさけて 挙あらままつとさとの
方のそきとの 吳ごあるより いわれ一 成石系なりしき正明せいめいが 篠しの茶ちや小月せうげつ

秋あきより秋あきより一ひと月つきより一ひと秋あきより一ひとのひとあきあへあづまやのまや
もその如ごとく 東屋あづまやの 新あたらふも 立たぬままやの 新あたらふも 立たぬれ
まどけさきか 篠しのの本もと色いろとのひの 方の 本もと意いとさへも
毎まいへさる 故ゆゑあるへ一 清少納言せいしょうなごん集しゆふ

このころなよなよといひ一のくま竹たけのあそびとさつと 叔しやく
あだありらる

とさへも ちかくなよ。とさるなよ。とさねてのあへきと五七ごしちふその
へんとて 畧りやくきてとさるなよ。とさへ一のり 外ほかあふよとのあはし

菊

菊きくの 律りつ代だいより 皇朝こうてうあり一とどいや一げあてめがべ死し 苑えん

あゝあゝわが家ふもさうさう今も花ふかのづう
生かす生かす花花菊菊とのみおさう神代紀小菊小菊理理姫姫とのみ
花名花名のありの菊菊と久久ことひひ一花花形形拵拵りよせ
さう如如くさまはあり水干直垂なとの拵拵と葉葉とぢとのり
同同ドドりあり名義と字字と似似たる故故小小和和名名抄抄小小菊菊四四聲聲
字字苑苑云云菊菊拳拳竹竹反反本本草草注注云云菊菊有有白白菊菊紫紫菊菊黄黄菊菊和和名名
加加波波良良与与毛毛木木一一云云可可波波良良於於波波岐岐日日精精草草也也とあり外外戎戎の菊菊
と混混雜雜さうかきありあり拵拵りのうつりさう通通言言あり字字者者
と等等しく関白白菊菊の字字音音の拳拳竹竹反反とも居居六六反反ともありて
全全く等等しく字のまことククリリククルルククレレルルなとさうさうけけ活活生生の

用用言言之之字字音音の死死おありてうさうとありは似似よりても大大小小
異異あり當時時家家との庭庭小小生生トトさつる種種の葉葉の形形ふ自ら
生生物物のとい異異ありて今今系系以来以来の相相あり本朝朝通通記記小小仁仁德德天天
皇皇七七十十三三年年始始自自唐唐獻獻菊菊種種とあり何何と澄澄ふりさうお不
つらありとの天天皇皇の所所代代小小さるり古古事事記記あり書書紀紀あり
六六十十七七年年より八八十十七七年年まゝの事事あり記記されおかもかもかも
奈奈良良以前以前あり平安平安以後以後ありしと六六帖帖小小紀紀貫貫之之
古古作作とさうれて咲咲る葉葉の形形さひさうさうさう白白ふべり
あり
さのたひさう則則平安平安の都都へ奈奈良良以前以前ありさうさうさう万万葉葉小小

あづきまきり 後水尾天皇の

あづきの紫のえびみりれー菊のむのとまきり梅乃
うゝゝゝゝ

とよこ梅ひーの万葉集み葉死る死と外戎の楚辞み梅の
あり死ととのこまひーありされど今の葉の万葉集のひのまき
ありりしー梅の楚辞みあづきとれとる人むとよりまきと
ありてりれとる人ひのうゝゝゝ

わづのしん

人のそふあるとまきりぬるよりの長存の字又存命などの字と
かくその義ありやと問人あり答て曰く義のよりのあり言ひ

長経くまきりぬるよりの長存の字又存命などの字と
経の義ありば別長存存命などの字ありー長存存命などの
字の義ありて言の意の長くそふありるれが長経の字の意
ありてありりる

髪髭と墨めて漆む

曝耕録中書丞相史忠武王髭髯已白一朝忽盡黒世皇見
之驚問云史技都汝之髯何乃更黒耶對曰臣用藥漆之故也
上曰欲何如曰臣覽鏡見髭髯白竊傷年且暮尽忠於陛下之
日短矣因漆之便云而技交心不異疇昔耳上大喜云
理屈げてそのえんぬの人とせのめざりー髭髯白くとも壯士ふ

少々
マカニ
マカニ
マカニ
マカニ

勇目

廿三

かろくんと忠勤せんは長なる老の本意あるべきと白髪と
 悪くぬりぬりしうりべとむらひ好色の外はしつぎるひさる
 べきあつりとして老衰の壮健かかへるか由あらず老衰人の益
 小由あらむ人かろくんのこゝのそと友実盛が顔髪と髪あて
 條し木曾我仲の討ち小向小討小我仲の緒軍小余しと
 我幼少の時小既小殺さるべ死と実盛が情あてのされとねは
 再生の大悲あり必討べうむ顔髪白き老武者とを実盛
 むれと命令ありしとと聞ゆてかく髪あて洗て髪や死て
 出陣しこれに塚太所光盛の實盛と若武者とえて討
 ちりし塚極に次所兼光としてあて洗りしうが白髪

あつりせしうりし是れ人むせのうらり小あつる忠なり勇なり智
 あり信あり義ありらりべとむらひ偽賢人と同年の終小非を
 花

いあへい木あても草あても今日のみ人小死の嘆とて見えざり
 よめりいさか死とのこむらひ寄万葉集小あまこあり古今集
 の及びさうとむねと死との入とと申あひ「死の鏡とある水の
 云く「流る川と死とて云く「死をむらひの香ふむひけり
 ちまらひの栞と死とのこむらひ又「死はつ人まらつ時の云く是れ
 菊あり「さむびく山の死のうげりもままの栞さうら後山吹
 つとなどかむらべて死とのこむらひあり後世ふりうりてい

花とつが頸もさゆさうし小限まりいり小ゆあまうせて
 桜と花とのいん小限るべきああず花て小花の中
 小をさきてめてうさひさきむいさううさひさうりささ
 うる花多死外戎の玉がういやしきあへ鶴林玉露小洛陽人
 謂牡丹為花西都人謂海棠為花尊貴之也といへるの
 うけさる玉友あり牡丹海棠などさういやしげあてうらぶ
 べき小あさむさうていそ容貌美藤の女官のおまけさる安と
 厚化粧の俳優人の粧ひさる安との如し

かつと

和名抄小鯉加豆乎式文用堅魚二字大鯛也大曰鯛小曰鯉

鯉
 大鯛
 小鯉

鯛 鱈魚也とも皇初小限りさる魚あて外式あはり中山
 傳信録小佳蕪魚とある加都乎と誤りて他魚小号さる
 べし今清園小鯛魚といへるもあへ魚さる景行天
 皇五十二年八月伊勢行幸し終ひそれよりあがりて十月小
 上徳玉安房の浮島宮ふりさる終ひさる小御供さる磐鹿六
 雁命角弭弓と以てあまの魚とあり一左小頑魚と号く
 鯉小堅魚といふ魚と年申行事秘抄小あまの記紀の
 鯉のりさる書紀小伊勢より上徳へあがり幸まらるる
 ありて白蛤と取て六雁命小勝とつらうし終ひ一そのあ
 鯉ハ上古よりありしと生あていふを皆乾て堅くして食

ひー友み堅魚の名おせしり 延喜式みあまこあるも皆
乾て堅さ之鎌倉の匠の生あてらふ人あじさぬれど
今いもも人より先み和親食んとあそり上饌みとを
らね下儀実上の英味とあまり

神の御姿

神の御姿と画くの恐るべく怯むべきり人の目あはるえ
終りぬ故み隠身とのみと畧きて神といへるなり 天地の始み
天津神とありの獨神成まて御身と隠し終ひきとあるあて
御祖もまゝかのづうまりお終ひ其処みまは 代神の御目
ふもるえ終ひさりー友まり人の世とまりていづまの神も

おみまりーまざり人のめみえ終りぬあみあまて神と
りり神の名のこめてええねばりーとありあろりり
つが籠の中より主君の足終りとあそり 廣庭あて下終み不致
のまざする如きみのなりまそー人みさとーりみありて神
次女ありりりみりあまみ或は老翁童女などの次女と見え又の
大蛇極獣などみええて言の御姿いなるとあさり人代み
及びて高德賢女の忠孝武勇の人など一社の神とあり
言の存生の時の終りて画んみあー終りあそり神代
神のいろふともかくべきやうなり

まろり せいご あり

まろの街及の盜賊と云ひまろの旅の者といひありの
おと入組おと入組籠籠ありといひの強あま和名抄和名抄籠籠説文云竹籠
也須利須利籠籠唐韻云飼馬籠也波太古俗用旅籠二字と

ありて今の世の兩掛披箱或ハ柝あきといひおのれあり又
骨柳こつりゅうの字ハ附會ふくわいあり行李りょうぎの字ハ旅具りょぐありあり人のと
あり欽明天皇記ハ行李者百姓之所懸命しんめいとあり尤傳よくでん
行李注ハ使人也とあり資暇集しじあハ字誤作李り李古使
字とありかまが行李りょうぎありて行使しんせありとさると旅具りょぐの
名とせし書言故事ハ行李人遠行必有行囊也とある
より怨あまりり無盛集むせうハ旅人りょじんのく間ひまハ盗人ぬすびとのありあり
旅人りょじんのありありとまことむむきとまやくいすね
のとねうち
はまろまこと旅人の衣後墨綫いごすみせんと入るいれ袋ふくろ或ハ紐ひも籠籠入る

日の重おもと上かみと混まとてひとりのみありたる外ほか戎やまめて魏きん晋しん
の比ひより混まとるより宋書そうしよあり今の三日いまひ己日こひよりでも
上かみ己日こひとのひがよりりく但たゞジャウシの目めと音おん列れつ使しがままジャウウと
と唱なうの松まつや

江戸人の勇氣

千早振ちはやぶら袂たもと伏ふのまゝあり勇氣ゆうきおとろへざうい江戸人のいさゝりひこ
ゆとどき火ひのあゝびおもおもてもあゝむ赤裸あかむねありて火中かちゆう小
をせ入防いりぼうありさかぬいさまきさういづれのふおも及およ及およ及およ
又人ひととあゝがみ時ときありありあゝえりのおあうていさうふいさゝりひおも
て切きべくもあゝむそのいさゝりよりあゝりりりり脱だつ小万葉せうまふ葉は葉は

小鷄トリがむく東男あづまおとこの出向いせむかひひめりいせむて勇ゆうとる武ぶき軍士ぐんしと

ねぎねひねぎねひ云いとよめりまゝ續つづ日本紀にっぽんぎ神護景雲二年九月壬

辰たつみ云い兵士へいし之設機しやうき要是待えいぜいたい對敵臨たいてきりん難がた不惜生命しよくせいのち習しゆ戰せん奮ふん勇ゆう必かならず

爭あらそひ先鋒せんぽう云いまゝ同九年どうくわねんの宣命せんめいふ曰いく東人あづまびとの常つねふりらく額ぬかあり

箭やの立たとも背せいあり箭やの立たともひて君きみと一心いっしんとりて守まも護ごありの云い

とのこまへりその猛まう烈れつある壯士さうしの多おほきいのづきのふおも及およ及およ及およ

賤いやしきととへるがむう下しも總すべ出で成田なりた郷市きやうし川がわ村むら小こ堀ほり城じやう守しゆと

りる使客しやく江戸えどふむて慶安四年けいあん辛しん卯みづのへ男子おとことらあり是これ初はつ代だい市し

川がわ圖ず十じゆ席せき之の延えん室しつ之の知ち年ねん五月ごご木き挽ま所ところ山やま村むら庭ていめて曾そ我が五ご席せき時とき

致いたの役やくと廿五にじふご葉はめて勤ことめり是これ荒あ事じの始はつめめて江戸人の

心ふか多へりときより後の荒事なされ言ひ入る人なり
ありおのづから勇気ゆりたる風あるが故なり

庚申狂哥

千歳大人の別荘にて庚申祭の夜季夜大人と振られて千
歳祭のようある等

食事も女もぬる季夜のおどる物こそ酒ありけれ

とあるふき季夜祭の久しふ

再いと千歳おんゆれと芦花のいまおんよきさるらん

とよまれりといえん元真集ふ

難波浮とげとふおの芦花のいまおんよきさるらん

とあるとよまらり

神位

いしり郡縣のほいあとの大社小社の神位階と授けり
神の所位ありて神社へつけ給へる位田ありて別社あり一
現米二千石二位の千五百石三位の千二百五十石四位の
二百石なりおまて位階きり給へる位田とき給りん後
封建とありて社所兼ありて定まりあり位田の加増さ
左小位階の昇進ありきる左大社旧社も二位に位なるま
あて止まり給ひし由ありきると進歩の由も左小社ま
私小系祀する社とありきり小正一位と稱するといと多し
備上

ひかるとつらうおせり 曇月の畧祭の假字あり 管目之天工
物佳兵篇小弧矢章云響箭則以寸木空中錐眼為穴敷矢
過招風飛鳴即莊子所謂嚆矢也とれ即管目なり 鑄もかり
字あり名義ハ神振箭之カニブリヤの之と畧さりヤと約めたるこ

墨引薪

正月十五日武家の門小松薪小墨あり十二筋横小引さるとおし
かゝり年中新利の所かま木の意ハ天武天皇四年正月戊申百寮
諸人初位以上進薪とあるが始めて雜令小允文武官人毎年
正月十五日并進薪長七尺以二十株為二擔まゝ延喜主殿寮式小
年中所用御薪湯殿御料一百八十荷御匣殿御料七十二荷

料一百八十荷御脚水料二百四十荷御炊料七百八荷儲料二百荷
中宮御贄料五荷との外小江次第小年中所用御薪司并五幾
内國司供進まゝ儀式帳小十五日称宜内人等御竈木六十荷奉進
ふとあり 年中新利の意あり十二筋墨引して十五日門の左右小並
り 因ある年小十三筋引所家もあり

まつらさよ娘の衣ふりり

大伴狭子彦とわふへまむけふつらされし書紀小あり
妾任用振さうれとてひきありしと万葉集小ゆかの玉の
凡古記小あり 夫とあひて衣とまりし事ハ枕草子按ふかの
凡古記小 擧被招因以為名とあり 被と巻て振し衣小其山被

振峯と号しより一人为名とのみ二字と為石といはれりて慕夫石
の扱とつくりしをえり

鎗

鎗の後世の物なりとの人と名目とを後まき其畧の神代よりある
なり時代のうつろひ小まきかひて毎利小まうせ制式つぎくみ
ことまき神代小あり一矢のぬふと八千矛嚴矛八尋矛など
用一熟なりとの人が別物の如くあめれと用おむひさみつきや
扱小不ととやりのつるささとちとのつるも漸切扱の名なりと
り小名目の大平記が作る巻二十五の佐吉合致の條小其次小一人是も
法師武者とけ七天あまうりもあらんといはれりて阿間了禰と名

ていそ

のりて康徳威の鑑小小太刀とまきて柄の長さ一丈むり小見えらる
やりとるのひらび小川とてまきりも擬錢せたりけり云同巻
二十に小流谷伊勢守あまうり小流く長返してる小矢之筋うち餘あり
二処つうれまきば云同巻二十七小細川お摸る清氏軍評定の條小大
和河内和泉紀伊守の宿軍の既立小版て一面小楯と厚きまき楯の
うげ小餘長刀のおおの元と五六百人づとらて云とさりかやりのり
名目の始て物小見えらるる其畧の神代よりある梓あてとりの小あは
或人云く楯と箱といはれり互小文字とあて遠くさるる楯の竹りてまむる
あられバ竹小従ふべりおの木のりて遠くさればあはるさやふべりと

楯箱

傍目

新古今集

心より身もあはれいふさききり 晴るの秋の夕ぐれ
とあまの上人の家集あての 沃べ小野のさてる所の屏風の絵とよ
きしよりさきと相模小湊綾歌小野立沃とり小所出来て小房と
遠く西行菴と号けて侍一人佐おせりその菴あぬは上人の杖より
とて女竹の径一寸余長に尺余の杖と花めよりその上下の藤のこ
ありて中間あひ解り 性来の人よりさきならぬ人あり
竹もせあひある物みや 王氏彙苑小篁簾竹有建安一節長
大餘まじり本草細目小篁簾竹一節近丈潜確居類書小篁
簾竹生水邊長數丈圍一尺五六寸一節相去六七尺當麻中將

姫曼陀羅縁起小出庭前研一竹為軸竹乃一夜之中所生長一丈
五尺無節卷而為軸又華夷通高考小咬啮吧國及雲南土産
の部等小も濶竹とて一節の間四五尺あるより見えり
云く奥州松島ワクラ考小 所生の竹一節二三尺遠杖佳品と
世あひさうある物さるん

私の官位

平の義村が私小三浦父と名のりしと勅使下向の時あひ荒次所と
名のまり是勅許さきぬるれば位記口宣もなうしん三浦の位豆
あて下玉うればぬいり守の従六位下あて椽の従八位下さきハハ
その間お當るるべしとみもかく小もその位いささう小犯ささうしん
又之好大岩の従位下小叙せらさしとわけて私小従三位中納言と

名のり 武田晴信の従に位下大膳大支あると私小法性院大僧正
 と名のり 足利義隆の 朝廷とさう 壘て私小緒士の官位と叙任
 せりこまらひ 朝廷とまいがらふある 教同茶あて実の武及小
 あらむのりへ 兼平の次相馬小太所平頼門が私小いづらう 新皇と
 名のり 大臣以下文武の百官と壘一 事古事談ふあり 正應の次浅
 原八郎為頼が矢小大政大臣源為頼と印分らう一 東鑑小
 ありこまらひ 狂乱人あて論のかぎらうあり

傍 廂 卷 之 二

